

理念哲学研究部会

2010（平成22）年度部会報告

研究部会メンバー 福留民夫、山本毅、武藤信夫、石塚光政、村山元理、遠藤梨栄、小坂勝昭、西藤輝、佐々木有一、佐藤陽一、竹内予備子、田中宏司、辻井清吾、長塚皓右、西村晋、新井信洋、井上俊典、青木崇、高橋 太一、加藤比呂人、

* 宇佐神正明（*印は会長 計21名）

"研究部会 設立年月"

1994（平成6）年3月

"22年度 研究活動 報告" 毎月第4月曜日 17:00-19:00, 月例研究会を実施。当部会は福留会長、佐藤幹事のもと、

例会活動を行ってきた伝統のある部会で、2011（平成23）年3月例会は155回目。

会の目標は第一に、研究活動古今東西の哲学や人物の思想、経済思想を学ぶことであり、第二に、新世紀の指導精神となる普遍的な指導理念を構築することにある。

2006(18)年度から古典の輪読会を開始。『大学味講』、山本七平『勤勉の哲学』を輪読

4月 佐々木有一「人生観と仏教（ノート）」16-18、「五位百法」を中心に説明

5月 山本毅『勤勉の哲学』第3・4章の報告をもとに時代背景等の検討。

6月 佐々木有一「人生観と仏教（修道論）」； 宇佐神 ジャック・アタリ『21世紀の歴史』

7月 宇佐神『勤勉の哲学』5-6章、佐藤陽一 総会におけるアメイジャン氏の講演の紹介

8月 石塚『勤勉の哲学』7-8章、佐藤 SBE 30th Annual Meeting の報告；暑気払い

9月 佐藤『勤勉の哲学』9-10章、新川「経済倫理の理念的検討の射程」（大会発表準備）

10月 佐々木有一「仏教と経営倫理との関連」

11月 竹内『勤勉の哲学』11-12章

12月 『勤勉の哲学』の小室直樹氏による「解説」をめぐっての合評会、サイゼリアで忘年会

2月 宇佐神：「日本の精神的古層をめぐって」問題提起

3月宇佐神：「日本における和の理念の形成をめぐって」

付記：研究会場は、2011年1月までは東京国際大学早稲田サテライト、2月以降は学士会館
"研究成果" 今年度は以下の研究活動を通して、今後への方向性が見えてきたと言えよう。

1) 山本七平『勤勉の哲学』を通読し、そこに提示された、中世とは異なる今日にいたる日

本人の思考様式を把握し、その問題点に迫ることができた点である。

2) 佐々木会員の仏教ノートを通して、日本社会の抱える問題点がより鮮明になった。

3) 佐藤会員を通して、日本社会の疑似共同体としての問題点が提携され、真の共同体の

形成が日本における経営倫理研究上の重要な問題として浮上してきた。

"4) ジャック・アタリ『21世紀の歴史』や日本の古層の研究を通して、全人类的課題として経営倫理の問題が取り上げられ

なければならぬことがより明確になった。単なる、東洋や日本の先哲に学ぶだけでなく、彼らがその時代にあって取り組んだ

問題意識を共有することへと研究方向を転換し、経営理念を発掘し、世界と共有する必要がある。

"

5) 研究発表大会では新川(部会推薦)と宇佐神がそれぞれ問題を提起することができた。

2011年度は21世紀を生きるうえでの経営理念の発掘と確認ができればと願っている。

"2011(23)年度活動予定" 4月4日 加藤:「日本における<はたらく>ということの意味ー神道的理解を中心としてー

5月16日 西藤:「聖徳太子・十七条憲法」の視点から

6月6日 未定

7月4日 未定

監査・ガバナンス研究部会

2010(平成22)年度研究部会報告

"研究部会メンバー" 阿部和義 今井 祐 上原利夫 大関 誠 岡田佳男 五来禮一 佐藤陽一 佐藤伸樹

島村昌孝 多田直彦 中村 眞 平野昌宏 藤井保紀 山脇 徹*

(注) 期中に2名死去(泊 久次、貫井陵雄)、2名退会(小林仁志、中濱 久)あり。

五来禮一、佐藤伸樹は4月初めに退会。(*印は部会長 期初18名、期末計14名)

"研究部会 設立年月":平成7年(1995)3月

"22年度 研究活動 報告" 1. 部会基本テーマ:「企業不祥事に関わる監査役の役割」

2. 個別テーマ:個人別に割振りしたが、二名の死去と二名の退会があり、次のようになった。

22年4月:藤井保紀 「国際会計基準(iFRS)の概観」

小林・佐藤陽 「取締役・監査役業務執行確認書の義務化」

22年6月:山脇 徹 「英国FSMAとFSAの概要(FSAの精神とその方法論)」

22年8月:佐藤陽一 「監査役に求められているものー」レポート・ガバナンスの視点から」

22年9月:上原利夫 「公認監査役論と公益監査役論」

22年10月:佐藤陽一 「サンデル教授のハーバード白熱教室」

22年11月:大関・平野 「企業不祥事防止のための内部統制監査実務上の留意点」

23年1・2月:全 員 「ハーバード白熱教室の企業・監査役での活かし方」

23年2月: 今井 祐 「継続的倫理監査の重要性と監査役倫理コードの必要性」

23年2・3月:全 員 「部会名称変更」 「23年度部会基本テーマ検討」

3. 研究発表大会 22年10月 今井祐 「公的規制と企業倫理ー証券取引所企業行動規範強化の視点ー」

22/5, 6, 7, 8 の4ヶ月に亘り本件論文に関する部会説明あり。

4. 研究交流例会 22年12月 山脇 徹 「企業不祥事の歴史的対応と監査役のあり方」 部会でも事前説明

"研究成果" 1. H22/10月研究発表大会での今井 祐部会員による発表が行われた。その論題は

「公的規制と企業倫理—企業倫理より見た、証券取引所が定める「企業行動規範」強化の視点—」。

上場企業は証券取引所による規制に従うが、その企業行動規範をもっと強化して、企業倫理強化につなげ、不祥事防止の効果を上げることが必要との主張である。東証企業行動規範の強化案も提示しており、的を射た提言といえる。

2. 22/12月研究交流例会での山脇 徹部会員による発表が行われた。その論題は「企業不祥事の歴史的対応と監査役のあり方」であった。

企業不祥事の歴史を概観し、それらに対応した監査制度の変遷を説明。不祥事防止と監査役の対応につき、コーポレート・ガバナンスや内部統制の強化並びに高潔な監査役活動、そして国連グローバル・コンパクト等国際的対応への取り組みなどの重要性を指摘。

3. 個別テーマでの成果：(1)国際会計基準(IFRS)への理解を深めた。

(2)役員業務執行確認書の重要性を確認した。

(3)英国 FSMA と FSA の理解を深めた。

(4)監査役に求められるものの確認：会社とは何か・経営理念の重要性。

米国での動き。新しい公共の確立。

(5)公益監査役を導入すべきとの主張に賛意あり。

(6)不祥事を防止する内部統制監査の留意点として、COSO 項目の監査と監査役の姿勢が大切。

(7)継続的倫理監査の重要性と監査役倫理コードの必要性を再認識した。

(8)ハーバード白熱教室=現代の正義のあり方 をどう活かすかの必要性を確認した。

"平成 23 年度 活動予定" 1. 部会名称変更：「監査・ガバナンス研究部会」に H23/4 から変更することになった。

研究対象を幅広くし、コーポレート・ガバナンスまで含める事にする。

2. 部会ミッション(使命)変更：従来の表現を次のように変更することになった。

“監査を通じて、「経営倫理」の観点からコーポレート・ガバナンス（企業統治）について研究し、健全な企業経営に資することを使命とする。”

3. 23 年度部会基本テーマ：「健全なコーポレート・ガバナンス（企業統治）を実現するための社外取締役・社外監査役の任務と選任」 に決定。

4. 23年度個別テーマ：基本テーマに沿って、23年度の個別テーマを討議・決定予定。
5. 部会は原則、毎月第3金曜日の14～16時、神田の学士会館会議室で開催しています。
新年度から研究対象が広がり、監査以外のガバナンスを含めるため、上記テーマや部会ミッションに関心ある方々のご参加を歓迎します。

実証調査研究部会

21年度研究活動報告

当部会メンバーであった瀬野 泉 氏のご逝去された一方、新たに横田理宇氏（麗澤大学大学院国際経済研究家・博士課程2年在学中）が加入した。

これまで当研究部会（略称：調査部会）活動の柱の一つとしてきた「企業倫理の制度化に関する定期実態調査」を昨年度で終了したため、現在、新たな「企業倫理に関する実証研究」の方向性について模索中。その一環として、以下のような部会研究会を開催した。

・2009年8月18日（火）麗澤大学にて

①研究報告 報告者：横田理宇、報告テーマ「組織公正と企業倫理」

②フリーディスカッション：「今後の部会活動の在り方について」

部会の主要メンバーがそれぞれ学務等で多忙につき、部会の研究活動は上記1回の実施だけに終わってしまったことを、部会長として大いに反省している。

*研究成果

昨年（平成20年）実施の「第5回・日本における企業倫理制度化に関する定期実態調査報告」の成果をふまえ、以下の論文を発表した。

・日本経営倫理学会実証調査研究部会 中野千秋・山田敏之「我が国における企業倫理制度化の変遷：1996年～2008年」（社）企業研究会『Business Research』No.1021, (2009年6月1日発行) pp.80-93.

また、経営倫理実践研究センター『経営倫理』に、以下の研究部会紹介記事を掲載した。

・中野千秋「JABESの研究部会紹介・実証調査研究部会」『経営倫理』No.56（2009年10月25日発行）p.42.

*22年度研究活動予定

このところ、主要メンバー（特に部会長の中野）が多忙のため、部会研究活動が停滞気味になっている。この現状を大いに反省し、平成22年度は、新たな研究テーマを設定し、部会研究活動の再活性化を図りたいと考えている。

CSR研究部会

21年度研究活動報告

毎月第2火曜日に電力中央研究所会議室（大手町）にて部会を開催するとともに、以下の活動を中心に行った。7/14（火）には、独立行政法人製品評価技術基盤機構にて開催し、NITE スクエアおよび関連施設の見学を行った。

(1) 部会メンバーによる事例・研究報告

- ①「ワーク・ライフ・バランス施策の有効性の検証とその推進に関する提言」（小池裕子）
- ②「“自社強みを活かした”戦略的 CSR による社会課題への対応」（水上武彦）
- ③「コマツのコンプライアンス活動について」（新城 修）
- ④「カナダ・ケベック ISO/SR 総会」（矢野友三郎）
- ⑤「世界同時不況に耐えうる経営の根幹」（萩原道雄）
- ⑥「CSR 経営としての企業グループ・ガバナンス」（高野一彦）
- ⑦「三菱化学グループのコンプライアンス実践度診断」（山中 裕）
- ⑧「会社を甦らせる CSR、逆境経営 7 つの法則」（水尾順一）
- ⑨「ネクストの経営理念実現に向けた取組み」（高橋貢・田中めぐみ）

(2) 部会メンバー以外による報告

- ①「オリセットネットを通じたアフリカ支援と住友化学の挑戦」（住友化学（株） 水野達男・広岡敦子）
- ②「リコーグループの CSR 活動について」（(株)リコーCSR 室 吾妻まり子）

(3) 明治学院大学の CSR 講座

明治学院大学の一般社会人を対象に実施した CSR 講座（2009 年度、4/24～7/17）において、水尾順一、蟻生俊夫、清水正道、長濱昭彦、宮川聡、星野邦夫、斉藤全彦、明石雅史、萩原道雄、田中宏司の 10 名が講師となり、「CSR とその重要性」「CSR と環境問題」など CSR 関連のテーマでの講義を実施した。

(4) ISO による SR 規格化動向に関するフォローアップ

(5) 単行本刊行

『ビジネスマンのための CSR ハンドブックー先進企業の事例から用語解説まで』(PHP)を刊行。

(6) 雑誌等への執筆

『標準化と品質管理』（日本規格協会）「CSR 最前線」および日経 CSR プロジェクト『CSR 研究の最前線』を連載執筆。

(7) 日本経営倫理学会全国大会等における研究発表

(8) 学会活動への協力

(9) その他（メンバー間の情報交換、講演・雑誌掲載による CSR イニシアチブの普及など）

* 研究成果

- ①単行本『ビジネスマンのための CSR ハンドブックー先進企業の事例から用語解説まで』(PHP)

の刊行。

②『標準化と品質管理』および日経 CSR プロジェクトへの投稿。

③日本経営倫理学会誌第 16 号への投稿。

* 22 年度研究活動予定

平成 21 年度の活動成果を踏まえ、平成 22 年度も毎月第 2 火曜日に電力中央研究所会議室（大手町）にて部会を開催し、以下の内容を中心に活動する予定。

(1) 各メンバーによる事例・研究報告

(2) ISO の SR 規格のフォローアップ

(3) 学会での研究発表

(4) その他（尾瀬合宿など）

経営倫理教育研究部会

* 21 年度研究活動報告

本会は大学で経営倫理の教鞭をとっている者あるいは将来大学で教職につくことをめざして大学院で研究をしているものを対象とした高等教育機関における倫理教育を研究するための部会である。

本年度は 2 回の研究会をもった。そのうちの 1 回は前東北公益文科大学の中谷先生 9 月 7 日に上智大学を会場にして行われ、勝西先生、ボウイ先生のカント倫理学を基礎にしたビジネス倫理学のあり方について活発な討論が行われた。

2 回目の研究会は金沢工業大学の岡部先生に座長となっただき、実施されたもので金沢工業大学虎ノ門サテライトキャンパスを会場に 11 月 28 日に実施された。

この会では高田会員、谷会員の大学院生の最新研究のご発表をいただいた。

限られた時間の中ではあったが、それぞれに有益な時間を過ごすことができた。

* 22 年度研究活動予定

本年度も大学教員と大学院生の発表を中心に 2 回から 3 回の研究会を開催していきたいと考えている。本会は原則として東京とそれ以外の都市にある大学を会場として研究会を開催し、それぞれの地域の大学や院生にインパクトを与えていくことを計画してきたが、22 年度もその方針で一階は地方都市での開催を実施したいと考えている。

また、大学院生を中心として将来大学での研究、教育を目指す人材を育成する研究部会としての使命を明確にするとともに、研究発表大会などのおりに研究者、教育者として知っておくべきことから学ぶワークショップを開催する事も考えている。

"研究部会 メンバー" 荒川祥子、安藤顕、岩倉秀雄、上原利夫、遠藤淳一、遠藤梨栄、大泉英隆、岡田佳男、岡田祥宏、片桐明美、勝田和行、河口洋徳、北川則道、木下博生、熊本一夫、栗栖徳雄、桑山千恵子、剣持隆、小池裕子、※小坂勝昭、五来禧一、西藤輝、斉藤全彦、佐久間健、佐藤陽一、信崎健一、柴柳英二、鈴木啓允、瀬名敏夫、高橋太一、武谷香、田村尚子、出口純輔、中島悟史、那須一貴、西井寿里、西村大樹、西村秀美、根城泰、野瀬哲郎、野田賢介、橋本克彦、比賀江克之、菱山隆二、肥後文雄、古谷由紀子、古山英二、増岡泰彦、増淵隆史、松尾寛、松本邦明、松本正一郎、水野雄史、峰内謙一、宮川準、森香奈子、山口謙吉、山中裕、山本洋、横館久宣、吉村典久、(※印は会長、計 61名)

"研究部会 設立年月" :平成7年3月

"22年度 研究活動 報告" 月例会部会は理事会関連報告・時勢に合ったテーマについての発表および意見交換・

企業不祥事事例研究等に加え、テーマ別分科会の進捗状況の報告を行なっている。

平成22年度の月例会部会での主たる発表は次のとおりである。

4月：新部会長による運営方針の発表(小坂)、公益問題についての発表(5名)

5月：公益問題についての意見交換、「ロールズの『正義論』の位置付」(小坂)

6月：「公益監査役論」(上原)、『徳の論理』について」(峰内)

7月：「サンデルの正義論を読んで」(峰内)、

「社会的責任に関する円卓会議」(古谷)

8月：「SBE年次大会に参加して」(佐藤)、

『資本主義に徳があるか』を読んで」(峰内)

9月：「企業の配当金の考え方について」(上原)、

「食品の安全について」(古谷)

10月：「社会課題への取り組みと企業の存続」(武谷)、「INTEGRITYとJUSTICE」(小坂)

11月：「第18回研究発表大会を終えて」(反省を含めた意見交換)、

「経営倫理学に対する二つの問題提起」(峰内)、「インテグリティについて」(勝田)

12月：「台湾での研究交流会関連報告」(小坂)、

「国際会計基準と経営倫理」(上原)、「就職活動と採用について」(佐藤)

1月：「経営倫理の新しい三つの課題」(上原)、「就職活動と採用－その2」(佐藤)

2月：「年頭のご挨拶に代えて」(小坂)

「企業行動研究部会の研究の方向性について」(峰内)

3月：3月14日開催予定であったが3月11日の東日本大震災のため中止。

日曜ランチ懇談会は4月、10月、1月の3回開催し、平均15名の参加者があった。

"研究成果"月例会での参加者の発表や意見交換は非常に活発である。毎回2時間半の開催時間では不足するほどで、部会員の意識と意欲の高さが感じられる。部会での発表テーマは実務経験に根ざしたものも多く、あまり先行研究が無いものもある。

第18回研究発表大会では当部会からは武谷部会員が発表を行なった。

特定テーマについての分科会活動の内、環境倫理分科会は3年弱の活動を続けているが、対象範囲が深く、そして広いので現在は研究の焦点を「水」にあてている。

"平成23年度活動予定"当部会の会合は本年2月例会で第175回を迎えた。メンバー数は3月末時点で61名。

本年度も、昨年度に引続き月例会、分科会、日曜ランチ懇談会の三本立てを進める。

分科会については研究したいテーマを持つ部会員が発起人となって3人以上のメンバーを集めれば発足できることとしているので、新しいテーマによる分科会を増やし研究を深めて論文や研究発表につなげて行きたい。当部会には豊富な実務経験を持つ部会員や海外勤務経験者が多いので、実務的な視点やグローバルな視点を研究に生かして行きたい。

日曜ランチ懇談会は、月例会に時間的に出席できない部会員も参加でき、全く自由な意見交換ができるので、年3回程度実施する予定である。

経営倫理教育研究部会

2010（平成22）年度研究部会報告

"研究部会メンバー" *梅津光弘、中谷常二、岡部幸徳、高浦康有、鈴木由紀子、潜道文子、葉山彩蘭、古山英二、宮重徹也、

横山恵子、武谷香、高田一樹、勝西良典ほか

（*印は会長 計24名）

"研究部会 設立年月"

平成17年4月

"22年度 研究活動 報告" 本会は大学で経営倫理の教鞭をとっている者あるいは将来大学で教職につくことをめざして大学院で

研究をしているものを対象とした高等教育機関における倫理教育を研究するための部会である。

本年度も2回の研究部会を開催した。本年度は若手の研究者の育成を主眼に於き、

大学院生の発表を中心とした研究発表会を開催した。

また、本年度は学会のレベルアップをめざして、年次研究発表大会（上智大学で開催）

の折に、学術論文の意義、作法、文献検索、文献表、注などの付け方に関わる

ワークショップも開催した。このセッションでは慶應義塾大学メディアセンター、のレファレンスライブラリアンの森嶋桃子氏および立教大学の河野哲也教授にも御発表いただいた。このセッションには約30名程の会員が出席され、大学院生のみならず実務家出身の研究者からも好評をいただいた。

"研究成果" 研究成果についてはこの大学院生が修士論文その他のかたちで公刊している。また一部の発表については修士論文提出後に学会でもその一部を発表してもらうように奨励しており、論文の形で刊行される事を第一義的な目標としている。

"平成23年度 活動予定" 本年度も数回の研究発表会を計画している。本年度はできれば東京圏以外の大学を会場とした研究会を開催できればと計画している。

トップマネジメントの経営倫理研究部会

2009（平成21）年度研究活動報告

4月：トップ・マネジメントの経営倫理のチェック・ポイント作業（1）

5月：トップ・マネジメントの経営倫理のチェック・ポイント作業（2）

6月：トップ・マネジメントの経営倫理の原稿提出と全体調整（1）

8月：トップ・マネジメントの経営倫理の原稿提出と全体調整（2）

10月：トップ・マネジメントの経営倫理の出版とフォロー

11月：トップ・マネジメントの経営倫理の出版と今後の方針についての話し合い

(このほかに出版に向けての編集者、個々の執筆者との内容、ボリュームの調整等を行った。)

* 研究成果

『トップ・マネジメントの経営倫理』白桃書房刊、2009年10月：

4年間の研究成果として ①BERC対象企業のアンケート調査と分析②経済界の動向と監査体制③事例研究—保険会社、エンロン、NOVA、雪印乳業、台湾企業④BERC会員企業の経営者による提言⑤経営倫理遵守のためのチェックリストの内容校正で出版した。本書は特に実務界で好評を得ており近々再版の予定である。

* 22年度研究活動予定

書籍の出版によって研究成果は達成したため今後は再編成して行うことを考えている。従って本研究部会はこれで終了する。

関西地区研究部会

2010（平成22）年度研究部会報告

"研究部会メンバー" 大谷秀幸 加藤健二 池田耕一 大村卓一 浅利進一 島田 恒 葉山幹恭 谷口 照三

*吉川吉衛 西岡健夫 岸本裕一 西井寿里 高田一樹 永松博志 飛田治則 瓶子昌幸
足立 克之 吉川英一郎 *剣持 浩 持松志保 劉 宏成 松下幸史朗
長縄友明 他、(敬称：略) (*印は部会長&幹事、参加数約 25 名)

"研究部会 設立年月" : 1995 年 10 月

"22年度 研究活動 報告" 第1回 H22年3月29日(月)

葉山幹恭氏：会員(追手門学院大学 非常勤講師)

テーマ 大規模化される農業への危惧—オーストラリアの畜産業と環境—

第2回 H22年7月15日(木)

高野一彦氏：会員(関西大学准教授)

テーマ 「企業による従業員の監視と解雇」

第3回 H22年10月4日(月)

狩俣 正雄氏：会員(大阪市立大学 教授)

テーマ 「経営倫理とスピリチュアル経営」

第4回 H22年1月28日(金)

岡部 幸徳氏：会員(金沢工業大学 准教授)

テーマ 「金沢工業大学における「科学技術者倫理」の講義について
～ケース討論用ドラマを中心に～

研究成果 平成22年度は、標記4名の会員からの発表が行われた。

葉山会員からは、日本とは関係の深い豪州の農業が大規模化されていった結果

そのリスクの与える影響度やその対策についての説明があり、グローバル経済時代の国際的

影響についても議論がなされた。高野会員からは企業と従業員との良き関係作りの実態と

方向性について発表があった。ISO26000の「労働慣行」にもあるとおり、企業は国際的整合

に配慮し、従業員と良好な関係を築き、プライバシー保護法の制定が国際的にも必要である

事を主張された。狩俣会員からは新しい経営思想である「スピリチュアル経営」の内容の発表

があった。WHOが健康をとりあげてからこの思想が広まっている。人間は精神的あるいは

スピリチュアルな存在であり、生きることや働く意味を求めるならビジネスやマネジメント面では

避けて通れないほど大切である。充実した発表であった。岡部会員からは金沢工大で製作された
「科学技術者倫理」の講義紹介があった。その後、皆で具体的なケースメソッドの実践を行った。

"平成22年度 活動予定"

第1回 平成23年4月8日(金曜日:大阪商工会館)

大阪市立大学大学院 特任講師 松下幸史朗氏(会員)

テーマ 「リスクと知識創造」

第2回 平成23年7月予定 (大阪商工会館)

発表者及研究テーマは未定

第3回 平成23年10月予定 (大阪商工会館)

発表者及研究テーマは未定

第4回 平成24年年2月予定 (大阪商工会館)

発表者及研究テーマは未定

中部地区研究部会

2010(平成22)年度研究部会報告

"研究部会メンバー" 石川光男 伊藤敦 梅田敏文 水谷内徹也 宮重徹也 蕎麦谷茂 池田耕一 斉藤悦子

平手賢治 山田秀 札野順 志野澄人 FERRER 水谷良明 岡部幸徳 勝原裕美子

斉藤悦子 志野澄人 中矢俊博 橋本克彦 濱村由佳 平手賢治 深尾弘子 藤木善夫

* 堀田友三郎 他に本部役員関係者へ案内を発送 (*印は会長 計25名)

"研究部会 設立年月" 2000年10月23日

"22年度 研究活動 報告" "本年度は初めて2回の研究会を開催いたしました。第1回目は2010年7月31日(土)に金沢工業大学で実行委員長岡部幸徳先生のもと、16名の参加で盛大に行われました。報告者は2名で次の通りでした。①「独禁法をめぐる一考察—企業倫理の視点によるケーススタディ」愛知産業大学蕎麦谷茂先生、②「医薬品企業の研究開発能力の分析—研究能力の源泉は企業倫理にある—」研究会終了後は懇談会を開催し、充実した情報交換を行いました。第2回目は毎年、行っている日本消費者教育学会中部支部との合同研究会でした。2011年1月29日(土) 椋山女学園大学で30数名参加のもと、盛大に開催されました。①「家計消費とCO2排出量からみる29年間(1980年~2008年)のライフスタイルの変化と消費者教育」岐阜大学大藪千穂先生、②「ミニ・ミュンヘンと青少年への消費者教育」椋山女学園大学小田奈緒美先生、そして③「CSRと消費者教育」というタイトルで不肖ながら私、東海学園大学堀田友三郎が研究報告を行いました。終了後は場所を変え、懇談会を行いました。いずれの研究会にも本部から手島副会長にご参加いただき、大変感謝しています。"

"研究成果" 中部地区研究部会ではまだ、研究成果を公表するまでには至っていません。少ない会員数とわずかな地区研究会予算で成果物を出すことは至難です。毎年の研究会報告が成果と言えば成果です。小生(堀田)の報告は名古屋経済大学消費者問題研究所所報で論文掲載させてい

ただきました。昨年夏の蕎麦谷報告は今夏の麗澤大学での全国研究大会でより進化した報告がなされることを期待しています。中部地区における経営倫理学研究がいつそうと活性化できるように産学連携して研究成果物が出せるように微力ながら取り組んでいきたいと考えています。

"平成 23 年度 活動予定" 昨年度は初めて金沢工大で岡部幸徳先生のご尽力で研究会を開けました。今年もぜひ、金沢か富山で開催できたらと考えています。中部地区研究部会は会員数が正確には把握できません。現在は中部地区に住所がある方に案内をお送りしていますが、ご本人は会員の意識がないようです。毎回、この場で書いていることですが、今後において本学会活動を全国的に広げるためには北海道、関東、関西、九州地区部会程度は充実すべきだと思います。地区研究部会開催時に学会補助金を会場費、郵送代を出す程度でよいのではなかと考えます。本地区研究会では今年度も本部からの補助金は辞退しました。研究活動は自弁が原則だと考えています。23 年度予定としては夏に金沢で、冬に名古屋で開催を考えています。BERC との連携強化も大きな課題です。

国際委員会報告

JABES 国際委員会 2010 年度活動報告

2006 年 4 月国際委員会が組織され、2011 年 4 月をもってまる 5 年の時間が経過したことになる。この間、海外における団体も学者中心の純粋な学会から、実務家中心、コンサルティング企業、さらには CSR 活動の実践団体、NGO、NPO 等様々な形態の国際交流が発展してきている。また近年は国連を中心とした国際機関が経営倫理や CSR をテーマとした指針や原則を発効し活動を活発化させてきている。日本経営倫理学会にも様々な団体からの提携、協同研究等の申し入れもあるが、日本経営倫理学会の現状を勘案すると、これまで同様に関係の深かった重点団体との交流を深めていく事が肝要であると国際委員会では考えている。

2010 年度おもな国際交流活動を要約すると以下の様であった。

6 月 5 日開催の総会においては、一橋大学ビジネススクール校長のクリスチナ・アフメージャン先生に基調講演をいただき、現在全世界で起こっているビジネス教育のパラダイムシフトやアメリカにおけるビジネススクールの役割などについてご発表いただいた。

6 月 23 日には国連 PRME 第 2 回世界大会がフォーダム大学を会場に開催され、当学会副会長で国際委員会委員長の梅津会員が出席した。この会では全世界のビジネススクールや経営学関連の学部、またある場合は学長など参加し、責任教育原則の実施状況やこうした世界的な CSR 教育の現状について今後の戦略が討議された。またそれに続く 24 日にはニューヨーク国連本部において国連グローバルコンパクト第 3 回リーダーサミットが開催された。今回は UNGC 発足 10 周年ということで日本からは有馬 UNGC ジャパン・ネットワーク会長ほか数名が参加した。

北米地域との交流では、Society for Business Ethics の年次大会が 8 月 8 日から 12 日ま

でカナダのモントリオールで開催され、本学会からも高橋浩夫会長以下、井出亜夫、小坂勝昭、西藤輝、佐藤陽一、重本彰子、出口純輔、萩原道雄、古谷由紀子、古山英二、日和佐信子 (BERC)、稲石達雄 (BERC) 合計 12 名が参加、高橋浩夫会長、古山英二会員、井出亜夫会員の 3 名が研究発表を行った。

また、11月1日から2日には当学会と中國文化大學商學院 (台湾・台北)・中華民國多國籍企業研究學會協賛による「台湾・日本経営倫理國際學術研討會」(シンポジウム) が台北で開催され、当学会からは 17 名が参加、井上泉会員、狩俣正雄会員、谷俊子会員、野村千佳子会員の 4 名が研究発表を行った。同シンポジウムは合計で 150 名参加の盛会となった。

さらに 11月5～6日には国連 PRME 第 1 回アジア・フォーラムが韓国ソウル市の慶熙大学で開催され日本からは慶應義塾大学が参加した。6日には学生大会も行われ CSR 発表コンテストでは慶應義塾大学—インドグループが最優秀賞を受賞した。

例年 3 月に行われていた、國際委員会は東日本大震災の影響もあり開催できなかった。3月 1 日以降様々な会議、イベント等がキャンセルされる中で、大学に於いても卒業式、入学式の中止、新学期の延期などこれまでにない影響が出てきている。國際交流についてはその重要性はますます大きくなる一方で、今回の震災は日本全体のあり方をも変更させる国難であり、今後の学会活動全般について見直しが不可避となることが予想される。

(文責 : JABES 國際委員会委員長 梅津光弘)

2009 年度も様々な会員の活動がなされた。JABES 國際委員会としては、様々な活動の中から、國際委員会の承認のもとで行われた事業のみをここにご報告することとした。

2009 年で特記しておきたい事は、年初より新型インフルエンザへの脅威が内外で指摘され、多くの企業や大学も海外渡航の禁止ないしは自粛要請が行われ、実際に海外から帰国するにあたっては厳しい検査や帰国後の隔離や追跡調査が行われたという事実である。したがって、國際交流の観点からは大変難しい局面が年の前半は存在していたという事を指摘しておきたい。

例年多くの会員が参加する、Society for Business Ethics の年次大会も今年は例年になく参加者が少なく、アメリカ側からは懸念と同情の声が多かった。今年の SBE 大会は 8 月 6 日から 9 日までイリノイ州シカゴ市の Allerton Hotel で開催され、本学会からも数名が参加した。例年の様に開催前日には海外からの参加者に対して特別歓迎レセプションが行われた。

また大会初日の懇親会では昨年 3 月に来日され、JABES でも講演会をしていただいた Regina Wolfe Dominican University 元教授とご主人の Steven Wolfe(元 Northern Trust 銀行副頭取)のご自宅にご招待を受けた。Mies van der Rohe 設計のミシガン湖が遠望できるレイクショアドライブ・アパートメントの私邸に 70～80 人に上ろうかという経営倫理学会の重鎮教授が集まったの交流会は忘れがたいものとなった。

大会では古山英二会員が発表されたほか、経済学や金融工学の基礎を問い直す研究が印象的であった。また今回の学会ではラウンドテーブルセッションをはじめ、これまでにない研究発表、研究交流の実験的試みが行われ、これも大変印象的であった。今年も一部の参加者による報告会が9月の研究例会の場をかりて行われた。

10月3日には他大学の招きで来日中の元 SBE 会長で JABES でもおなじみのダリル・ケーン先生を囲んでの研究討論会が開催された。

さらに本年は BERC の国際シンポにおいて、米国に本拠地をおいて活躍している原丈二氏を講師にお迎えした。公益資本主義を唱える氏を囲んで国際委員会の一部のメンバーが懇親の時をもった。